

一斉指導、板書、校内研究 世界から見た日本の教育の強み

世界の国々に比べると、日本の教育はどのような点に特徴があるのか。未来に引き継ぎたい日本の教育の良さ、海外の学校から学べるヒントを、海外の学校への赴任経験をもつ3人の先生に聞いた。

——まず、先生方の海外の学校への赴任経験をお聞かせください。

嶋田 1994年から3年間、香港日本人学校に教諭として、2006年から3年間、バーレーンのバハレーン日本人学校に校長として赴任しました。香港は小学校だけで48学級、小・中合わせて約2200人が在籍する大規模校で、バハレーンは児童数30人程度の小規模校でした。

高橋 79年から82年まで、パリ日本人学校に教諭として赴任しました。帰国後は札幌市の公立小学校校長として勤務しました。定年退職後も海外の教育に関心があり、シニア派遣としてアイルランドのダブリン補習授業校（*）、イギリスのテルフォード補習授業校の校長を各2年間務め、11年3月に帰国しました。

継田 02年からシンガポール日本人学校クレメンティ校に教頭として、09年からは中国の大連

日本人学校に校長として赴きました。

グローバル化の進展に伴い 付加価値を生み出せる力が重要に

——海外経験を踏まえ、これからの社会を生きる日本の子どもには、どのような力が必要だとお考えですか。

嶋田 現地で日本企業の生産拠点がどんどん進出してくる状況を見て、グローバル化の急速な進展を肌で感じました。生産拠点の海外移転と共に技術も国外に流れ、国内産業の空洞化が進むかもしれない。そうすると、単に知識や技術を身に付けただけでは、仕事がなかなか見つからない状況が起こり得ます。日本にとって切実な問題だと思えます。バーレーンにいた時、彼らが既に太陽光をビジネスチャンスとして捉えていることに驚きました。既存の豊富な原油を

北海道札幌市立中の島小学校校長

嶋田 肇

しまだ・はじめ◎札幌市公立小学校教諭、香港日本人学校教諭、バハレーン日本人学校校長などを経て、現職。北海道国語教育連盟研究講師、札幌国際理解教育研究会副会長も務める。
札幌市立中の島小学校◎国際社会で信頼と尊敬を得るにふさわしい調和のとれた児童の育成を目指す。児童数は483人。



輸出するだけでなく、常に新たな付加価値を考えているのです。日本がこうした国々に肩を並べて繁栄するには、新学習指導要領で強調されているように、知識や技術を活用する力、思考力・判断力・表現力を育て、付加価値を生み出す力を付けることが不可欠だと感じました。

高橋 同感です。私はそれに加えてもう二つ、必要だと思ふことがあります。一つめは、身に付けた力を実社会や将来と結び付けて考えることです。アイルランドでは、中学生くらいから自分が就きたい仕事の実習に行きます。私のいた補習授業校でも、教員志望の卒業生が、実習をさせてほしいと来て、受け入れたことがあり

*補習授業校とは、現地の学校や国際学校（インターナショナルスクール）に通学している日本人の子どもに対し、土曜日や放課後などを利用して、国内の小学校又は中学校の一部の教科について日本語で授業を行う教育施設（文部科学省『海外で学ぶ日本の子どもたち』（平成21年2月）より）

元北海道札幌市立小学校校長

高橋承造

たかはし・しょうぞう◎札幌市公立小学校教諭 教頭、校長、パ
リ日本人学校教諭、北海道国際理解教育研究協議会会長などを務
める。定年退職後、アイルランド・ダブリン補習授業校、イギリス・
テルフォード補習授業校の校長を務め、11年3月に帰国。



ました。夢や志をもち、「学んだことをこうい
う風に役立てたい、生かしたい」と将来を見据
えて考える力が必要だと思います。

二つめは、自分の文化を誇りに思い、自分の
考えを伝えながら、相手の文化も理解しようと
する姿勢です。赴任国では声の大きい方が勝つ
と感じたことがあります。相手の気持ちと共
に全体を考える、両方が仲良くすることを考え
るのが日本の文化です。まずはこの良さに誇り
をもってほしいと思います。

継田 私の赴任していた頃の中国では、日本と
は異なり、何かを手に入れるために順番に並ぶ
ようなことは難しいと言われていました。異な

る文化の国に入ったなら、その国の文化として相
手を尊重し、その上で自分を認めてもらえるよ
うに発信していく力が必要です。加えて、何か
問題が生じた時には、知識を使って判断して解
決していく力がなければ世界に通用しないだろ
うと思います。

一斉指導や丁寧な板書など 世界に誇れる日本の教育

——お話にあつたような力を育むために、今後
も大切にすべき、日本の教育の良さはどのよ
うなことでしょうか。諸外国の学校教育の特
徴と併せてお聞かせください。

継田 中国の学校は、教え込みが中心です。子
どもは姿勢よく話を聞き、学校と家庭で勉強す
る時間は、日本と比べものにならないくらい長
いです。日本もかつては、知識・技能を一番に
重視して、教え込みの教育を行っていたと思っ
ます。しかし同時に、子どもが待つ時間や黙っ
ている時間を少なくしようと工夫したり、理解
がより深まる具体物を用意したり、子どもが考
えたり表現したりすることも大切にしてきまし
た。更に現在、今まで日本がもっていた一斉指
導の良さを生かしながら子どもの発想も生かす
指導、単なる教え込みではなくて、子ども個人
の意欲や個性を大切に教育にうまく転換で
きているのは良い点だと思います。

高橋 赴任国では、日本のように学級全員がき
ちんと自席に座っていることや、教師の一言で

同じ活動をさせる指導は「神業」と思われてい
ます。このような一斉指導の中で多くの先生方
が、問題解決学習を多く展開されていることは
素晴らしいことだと思います。このことに、海
外の教育関係者は驚きを感じています。

嶋田 「一斉指導の時代は終えるべき」のよう
に言われることもあります。そうではないと
思います。香港の日本人学校にいた時に取材を
受け、「子どもたちが一斉に掃除をすることは
信じられない」という内容の報道がなされまし
た。先日の東日本大震災でも、被災地の方の
落ち着いた対応に各国が驚きを隠せませんでした。



北海道札幌市立百合が原小学校校長

継田昌博

つぎた・まさひろ◎札幌市公立小学校教諭 シンガポール日本人
学校クレメンティ校教頭、札幌市公立小学校校長、中国・大連日
本人小学校校長などを経て、現職。北海道小学校理科研究会会長、
札幌国際理解教育研究会副会長も務める。

札幌市立百合が原小学校◎教育目標は「豊かな心で地球とともに
伸びやかに生きる百合が原の子どもの育成。児童数は711人。

た。一つの指示で混乱なく行動できることは、これまでの教育と無関係ではないと思います。

継田 海外ではよく、子どもは勉強が仕事で、掃除は仕事ではないと言われます。しかし、日本の学校では、集団生活の仕方、ルールや我慢の仕方でも学びます。このような取り組みは日本の学校教育の良さなのでしょうね。

高橋 指導案も誇れる点です。私を知る限り、海外では指導内容を確認する程度で、日本のような指導案を作ることはありません。授業の流れを想定し、子どもの反応を予想し、それに対



して、どう発問を投げ掛けるのか、どのような道筋で授業の目標を達成するかというシナリオをきめ細かく準備するのは、日本の教育で誇れる良い伝統だと思います。

継田 当時のシンガポールでは、コンピュータに学習内容がプログラムされていて、その通りに授業を進めました。子どもの予想外の発言を生かして学習を広げるような指導は、日本のように授業の目標の中心を押さえて、子どもの反応やそれに対する教師の発問を事前に考えておかなければ出来ません。

板書の完成度の高さも、日本の学校教育の特長でしょう。中国やシンガポールではコンピュータのディスプレイを使い、板書はほとんどしませんし、アメリカの小学校も視察しましたが、板書は重視されていませんでした。授業の流れが一目で分かり、色チョークなどを駆使して、一人ひとりの子どもの考えを黒板に位置付けていく技術、相反する意見も位置付けて新しいところへまとめていく技術は、素晴らしいと思います。子どもは板書を見てその時間に学んだことを振り返れますし、友だちが何を考えていたのかも分かります。自分の考えが尊重された、授業に参加できたという自信や意欲にもつながります。

同僚性が高く 組織的に対応できる日本の学校

——日本の学校の組織面では、海外と比較する

とどのような特徴や良さがあるのでしょうか。
高橋 これほど校内研究に力を入れているのは、おそらく日本だけでしょう。教師が互いに授業を見せ合い切磋琢磨している素晴らしい姿を、海外経験を通して改めて感じました。

嶋田 学校全体だけでなく、学年団や教科ごとなど、さまざまなレベルで指導法や教材を研究し、それを研究発表までするのは日本ならではです。教師の指導力向上に大変役立っていると思います。

高橋 海外では、他の教師に授業を見せることは基本的にありません。フランス人の教師に保護者参観について話したら、「どうして保護者に授業を見せる必要があるのか」と驚かれたことがありました。彼らが授業を見せるのは視学官の査定を受ける時だけです。よし悪しはともかく、それくらい授業の内容は個々の教師に任されているのです。

嶋田 バレーンの現地校では、教師は1年契約で担任を任せられ、職員室すらありませんでした。査定は給与に影響するので、教師は業績を上げることに必死です。教師として、子どもたちに「分かった」「出来た」といった喜びをもたせたい思いはありますが、個々に授業改善に取り組んでいますから、教師間の同僚性はほとんどなく、学校経営という発想もありません。教材研究や教材・教具作り、生活指導など、あらゆる面で組織的に取り組めるのは、日本の学校の大きな強みです。

言語活動の充実を図りながら 異文化を尊重し合える価値観を

——日本の良さを生かしながら、日本の教育を更に充実させるために大切だと思う視点をお聞かせください。

嶋田 まず、思考力、判断力、表現力を付けるために言語活動を更に充実させることだと思えます。これらの力が付く授業が出来ているか、子どもが今まで培ったことを使える機会となっているか、意識する必要があります。

継田 海外の学校へ出て感じたのは、子どもが自分の意見をはっきり言えるということ。これは30代後半に自分の学級で帰国児童を受けもった時にも感じたことで、海外の教育に関心をもつきっかけになりました。日本でも、言語活動を通じて、低学年から自分の思いや考えを伝えられるようにする必要があります。

高橋 評価も大切です。赴任国では、知識だけでなく考えも書かせたり、集団で議論をさせたりして力を測ります。自分がどう考えたのか、行動まで出来たのかというところまで評価の対象になります。テストの仕方や内容が変われば、授業もより変わっていくでしょう。

一方で、教えなければならぬ部分と、子どもに十分考えさせて思考力を育てていく部分とでめりはりをつけることも必要です。赴任国でも、低学年のうちは、基礎・基本を徹底して教えていました。

継田 習熟度別や少人数の指導も大切ではないでしょうか。習熟度別は差別になるのではないかと、という声を聞くこともあります。しかし、海外ではそういう発想はなく、保護者は喜びます。理解が十分でないなら、学習し直すために、小学校でも留年させることがあります。それが機会均等という考え方です。子どもの理解に合わせて進んでいくこと、それによって一人ひとりが出来たという喜びを感じられることが、本当にその子の力を付けることになるのではないのでしょうか。

嶋田 海外の日本人学校の運営費は、文部科学省、児童の保護者（授業料）、日本企業（日本人会）が3分の1ずつ負担しています。特色のある、魅力のある学校でなければ、子どもは別の学校を選択してしまうため、運営が出来ません。「ぜひ選択してください」とアピールした上でお金を預かるのですから、成果を出さなければなりません。学校の教職員全員が、常に必死ではない。お金をかけるからには、それに見合う取り組みにする必要がある。「例年通り」ということは、日本人学校ではあり得ませんでした。費用対効果や特色を意識した学校づくりの感覚は、この経験を通じて身に付けました。

継田 札幌市では「札幌らしさ」を出そうという方針で、各校が「雪」「環境」「読書」を大事にする教育活動に取り組んでいます。例えば、本校は屋上にソーラーパネルが設置されているので、子どもに札幌の自然を大事にしようとい

う気持ちを育もうとしています。日本でも、ふるさとを大切にしながら学校や地域の特色から何が出来るかを考えることで、特色のある、魅力のある学校づくりに取り組めると思っています。

高橋 補習授業校の子どもたちは、平日は慣れない外国語を話し、友だちとの会話が十分でない中で過ごします。このため、日本語が話せ、友だちもたくさんいる補習授業校は、彼らにとって大好きな場所であり、皆、とても意欲的でした。週1回ですから、指導内容は本当に子どものためになることに絞ります。保護者も、日本に帰国後、子どもが困らないようにしたいという強い願いをもっているのです。学校経営に大変協力的で、学校・保護者・地域が一体となつて「子どものために」学校づくりをしています。教育の原点に立ち返った経験でした。

嶋田 日本人学校の子どもは多くは、最初は泣いて現地へ来ます。「日本を離れたくなかった」と。しかし、帰る時は「もっといたい」と言うのです。それは、異文化、異質なものに対して、排除することがなく、どの子どもも自然体で過ごせる体験をするからです。日本人学校では、いじめは全くありませんでした。

継田 海外の学校の良さはそこですね。自分と違う文化や考えを認めてくれるのです。日本にも、さまざまな価値観をもった子どもが、今後は増えてくると思います。その子たちを生かして、互いに尊重し合える価値観を育んでいけるとよいと思います。